

『或る女のグリンプス』考(一)

吉 田 俊 彦

はじめに

『或る女のグリンプス』(以下『グリンプス』と略記)の一章で、読者の心に鮮明な印象を残す主人公・田鶴子の主要な特徴は、謙譲を美德とする古風な日本の女性の因襲を打破し、自己本来の命の燃焼を華麗にやっつける自由放逸な精神である。作者・有島武郎は、作中の十六章において、田鶴子の人物的特徴を次のように概括している。

《かの日清戦争の起つた頃を界にして、日本の女が感じ出した幻滅の悲しみと力が、恰好の使徒として田鶴子を捕へてから、^(一)田鶴子は自分が今まで全く知らずに居た自己に目覚めた。然し田鶴子は其自己をまだ全く自分のものとは思へなかつた。其のもてあつかいに迷つて彼女は何度つまづいたか知れぬのである。^(二)然し世の中もどうして彼女を助くべきかを知らなかつた、^(三)殊に目覚めかけた女に対して恐ろしい敵は男であつた。後のアダムは最初のアダムのやうな正直者ではない。女を全く奴隷の境界に沈め得た男の心には、女がもう一度智慧の果を摘んだと云ふ事は考へられないので、今までに見なんだ女性の出現を男は肉欲の新しい対照としてのみ眺めやつた。》(傍線引用者)

傍線部(一)で明らかのように、田鶴子は自我意識に目覚めながらも、それを尊厳な自己独自の存在の確証として自覚することができず、「もてあつかい」に「迷い」「つまづき」かねばならなかったのである。これは、傍線部(二)の「どうして彼女を助くべきかを知らなかつた」「世の中」が、旧来の陋習に固執し、助力どころ

か圧殺の手を向けたからに外ならない。抑止しようもない自己の内的衝迫に駆りたてられる時、田鶴子は傍線部(三)の「後のアダム」の生活論理に支配された社会体制に対し、無謀な戦いを挑まざるを得なかつたのである。

一章における有島は、奔放華麗に生きる田鶴子の自信に満ちた個性的な生を々と印象的に描き上げているが、この小論では、まず最初にこの田鶴子の人物形象を支える基本的モチーフを作品史的に尋ね、次いで第二に田鶴子の対人関係の主要特徴を捉え、最後に出航前における田鶴子の形象像を整理してみたい。

一 田鶴子の作品史的位置

『グリンプス』は、明治四十四年一月より大正二年三月までの二年間、十六回にわたり、「白樺」誌上に断続的に連載された作品である。これまでに発表されていた作品は、明治四十三年七月の脚本『老船長の幻覚』と明治四十三年十月の小説『かんかん虫』の二つである。まず『老船長の幻覚』についてみると、この作品は、^{注1)}情念をくすぐる妖艶な幻想医師の娘と死の危機感を喚び起こす幻想ABCと温かな骨肉の愛を揺さぶる孫娘と、そして、冷静な日常的判断を覚まさせる水夫長の四つの形象力学を支えにして、劇的要素が成り立っている。『グリンプス』の田鶴子に直結する人物は幻想医師の娘である。

妖艶な医師の娘の蠱惑性に魅かれ、彼女の夫をピストルで射殺しながらも、彼女を「手一つ握らずに上陸させてしま」い怯えていた老船長を、幻想医師の娘の蠱惑的な誘引力の支配下に再度置いた有島は、いくつかの愛の原体験を重層的に見据えながら、抑えようもなく心底に起こる情動の正体を見定めようとしていたものと考えられる。

蠱惑的な医師の娘を幻像に仕立て、そして、電燈の明りのもとでそれを消滅させる有島は、どこまでも無意識のうちに惹かれていた女の魅力の正体に着目していたと言えよう。この幻想医師の娘を通して捉えることのできた女の魅力の正体は、「彼女に祝福あれ。彼女によき夫あれ。彼女によき子女あれ。而して彼女の天使の如き純潔何時までも地の榮なれ光たれ。直かれ。優しかれ。美しかれ」(明治三十六年五月三日、日記)という神への祈念のもとに捧げた河野信子への純愛とか、あるいは、「彼女は実に余を不純より遠からしむる天使なり」(明治三十

七年八月三十日、日記」というファニーへの純愛を原型とするものではない。もっと本能的な肉欲に裏打ちされたものである。安子との結婚生活に入ってから後の有島が、安子との婚姻期において、「優しさ」と服従とによつて、夫に事を為さしむる女」(明治四十一年八月十二日、日記)に満足していた思いとは裏腹に、「烈しい恋」の「熱情にふさはしく報いる」(明治四十一年九月三十日、日記)愛を安子に求めたり、「いくたりの女に誘惑を感じたか知れな」(『死と其の前後』第三場)いほどの迷いに陥ってゆく情動に深く根を下ろすものである。

『老船長の幻覚』における幻像医師の娘は、当然、有島の無意識の情動的欲求を満たす魅力的女の象徴であり、「船のキール」が一度も波を切らない彼方の海」に向つての出航は、札幌独立教会からの脱退を決意した有島が、「人は相対界に彷徨する動物である」(『二つの道』)という思いのもとに、諸種の日常的秩序体系を相対化し、そして、自己の実存に徹して生きようとする生の象徴に外ならない。『グリンプス』の主人公・田鶴子の内的衝迫に重きを置く基本的生の姿勢と蠱惑的誘引力は、幻像医師の娘の特徴に直結しているものと云えよう。

次いで、『かんかん虫』についてみると、二稿の里から定稿のカチャへの改作過程に働く形象視点の変化が重要な意味を持つものと考えられる。二稿の里は、『カンカン虫』の娘たア云ひながら、箱入娘」の器量よしであり、そして、彼女の恋人・富はすべてが「気味の好い程小じんまりして、鼻筋の通つた眉頭の近い」(『江戸ッ児の典型』)である。つまり、この二人は似合いのカップルなのである。

この二人の間に強引に割り込み、里を横取りしようとする蓮田は、「土左衛門」のような「ブクブクした面」を持ち、金の力で「頭から被さつて来」る男である。彼の悪役振りが強く浮び出て来るのは当然の成り行きであるが、主要人物・里の劇展開に加える緊張要素は、孝養か恋愛かの二者択一に迫られて陥る苦しみである。「三日三晩泣き明か」し、やがて、蓮田の妾になることを承諾した後見せる里の「優しい」孝養は、前近代的な秩序の枠組みに嵌められた女の痛ましくも美しい哀感を浮び上がらせている。これと呼応する父親・吉の内的葛藤は、「当世」風に「義理人情を勘定に入れ無」い欲得と抑えようもなく働く骨肉の情愛との葛藤である。

これに対し、定稿のカチャには、二稿の里が見せたような女の哀感を認めるこ

とはできない。二稿の吉が娘・里に押しつけた「親の恩を忘れやがったか」というような古風な倫理的拘束力に悩まされることはなく、どこまでも「荣誉栄華で暮らそう」というほかには、何一つ欲のねえ獣」として、「当世向きに」生きることのできる女である。定稿の劇的緊張要素は、非力な「虫けら」のヤコフ・イリツチとカチャ親子が「虫けらで押し通」しながら、「人間の食ふものも食は無えで溜めた黄色い奴」を、どこまで剥奪し溜飲を下げるができるか、また、恋人・カチャを奪われた同じ非力な「虫けら」イフヒムが「虫手合の内懷まで手を入れやがる」グリゴリー・ベトニコフに対し、どれほどの報復を果すことができるかということである。

このように、定稿の有島は前近代的な秩序の枠組みの中で起伏する二稿の人情劇要素を捨象し、そして、階層的生活格差の大きい不合理な社会体制下で、諸種の日常的秩序体系を悪用しながら生きる「人間」階層の欺瞞に挑戦する「虫けら」階層の情動的生の意味に着目しているのである。この欺瞞に包まれた「人間」社会に対する告発姿勢と情動的に生きる「虫けら」階層の生の衝迫は、『グリンプス』の主人公・田鶴子の人物特徴を支える重要なモチーフになっていると言えよう。

二 田鶴子の木田との対応力学

田鶴子と木田の愛の成立と破綻との経緯を描く二章及び三章の内容は、田鶴子の形象視角を整理する重要な手掛りを与えてくれる。

田鶴子が木田と出会った時、彼女は「既に多数の男に恋せられて、其の間を手際よく繰りながら、自分の若い心を楽しませて行く程のタクトを有して居た」(二)が、多数の男に恋せられる田鶴子の具体的な魅力については、五つの観点から特徴づけられている。まず第一は「其紅い唇を吸はして首席を占めるに至つたのだと、厳格を以て聞ゆる老校長に思ひもよらぬ浮名を負はせ」(同)るような妖艶な蠱惑的魅力である。第二は「女学生界の流行を風靡」(同)するほどの「工夫」(同)を生み出す先端的な時代感覚とか、「教師や生徒の舌を捲かせ」(同)るほどの天才的な音楽才能を持った鋭敏な感性的魅力である。第三は学業成績において「首席を占める」(同)力を備えた高い知的魅力である。第四は師

の「不愛想」(同) 名言に我慢ができず、「ヴィオリンを窓の外に抛りなげて、其儘退校」(同) してゆく直情一途な若い情熱的魅力である。そして最後は、高い自尊心と過剰な自意識を支えとする挙措動作の演技的魅力である。田鶴子の木田に対する愛は、こうした田鶴子の魅力的個性が少しも侵害されることなく保証されるところに成立するのである。

「骨細な、顔の道具の整った、天才風に蒼白い滑らかな皮膚」(同) の外貌をはじめとし、「熱烈な」「感情」「機才」「名声」(同) として、それに伴う「高い」「自負心」(同) などを有する木田の特徴を考える時、彼は田鶴子の個性を侵害する脅威を備えた人物と言わなければならない。日清戦争の従軍記者としての栄光に支えられた世間の人気を背負う木田の存在的重みと「公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で」「持ちあしら」(同) いながら木田を手中に入れる母・親佐の存在的重みは、田鶴子の「欲望を極端に煽り立て」(同) るものであるが、本来、「競争すべからぬ関係の競争者」(同) である母・親佐に対し「見事な勝利」(同) を取め、そして、「日清戦争の余光」(同) が「太陽が西に沈む度毎に減じて行」(同) くとともに、田鶴子が木田との「恋愛の行衛を見失って仕舞」(同) うところには、個性侵害の脅威と戦う田鶴子の不幸な生の特徴が現れている。それは高い自負心と過剰な自意識をもって他者と競り合う田鶴子の「面目の美学」が招く不幸である。

有島が第一章の劇的緊張要素の構築に、この「面目の美学」を有効に生かしていることは明らかである。第一章の中心的劇要素は田鶴子の「面目の美学」と木田の確執との間に用意されている。「誰よりも先に目を付け」(一) たが、「誰よりも先きに眸を外らし」(同)、やがて、「乗客の好奇心が衰へ始め」(同) ると田鶴子を「本気に」「見詰め」す木田は、すでに、改札係を籠絡し、乗客を魅了しておえていた田鶴子にとって、征服しなければならぬ最後の敵対者である。「眼を鈴の様に大きく張つて、親しい媚の色を浮べながら」(同) 木田に領こうとする田鶴子は「此利那に対する態度」(同) を「予め」(同) 用意しており、田鶴子の自ら示そうとするこの好意は自信と計算に裏打ちされた演技的媚態である。これは改札係を籠絡する「花が咲いた様」(同) な微笑と同質のものである。それだけに、田鶴子の自信を砕く木田の冷淡な反応が田鶴子の心中に抑え

がたい憤怒の情を喚び起こすのは必然の成り行きと言えよう。この激情は、車夫に「青年の前で若奥様と呼ばれたのと、改札の叱咤」(同) によって、「平衡を狂は」(同) す「針の様に鋭い」(同) 感情に連鎖するものである。憤怒を抱きながら、木田に送るはずの「親しい媚」(同) を浮べた眸を隣席の古藤の頬のあたりに落した田鶴子は、「木田に見よがし」(同) の態度で「華かに」(同) 古藤に声を掛けるのであるが、これはすでに見てきた「面目の美学」のもとで自尊心の回復を図るものに外ならない。第三章において、「執念くも着き纏」(三) う木田の視線を感じながら、古藤に対して示す田鶴子の親和振りにも、同様の美学と意図を読みとることができると言える。

しかし、田鶴子はもとより、このような「面目の美学」のもとで自己を誇示する必要もないだけの魅力と備えた人物である。彼女が無意識のうちに浸る想像の世界には、彼女の意図的な生活意識の届かない本質的美質を覗くことができる。第三章において、車内に居たたまれずデッキに出た田鶴子が看板の「中将湯」(三) という文字を見て広げる連想は、「私生児の定子」(同) と「其の父なる木田」(同) の面影であるが、この「面目の美学」を離れた孤独な想像の世界に浮ぶ木田の面影は意外な様相を見せている。

江種満子氏は「中将湯」の看板からの連想について、「中将湯の看板には黒髪を切り下げにしたお姫様の絵が描かれてある。またこの葉は婦人葉である。だとすればつまりこの絵看板は、娘の定子とその出産にまつわる肉体の記憶を葉子に甦えらせたにちがいない。そして定子出産を結び目とする本部との連鎖を」と分析され、そして「肉体と精神の矛盾と統合の問題に日本の文学ではかつてない新しい角度から取組んだ」ものと評価されている。木田が田鶴子の媚びに冷淡な応待をした時、田鶴子の自尊心は傷つき、彼女は木田に対し憎悪の念を抱いたはずである。この想像の世界に浮かぶ木田の「眸の色」(三) や「皮膚の沢」(同) や「頭の毛」(同) などが魅力的に「どんどん若やいで」ゆくことは、確かに「精神」と矛盾する「肉体の記憶」として整理せざるを得ないのである。憎悪の対象乃至は無意識世界への抑圧対象であったはずの木田が、定子との関連によって無意識のうちに魅力的存在へと再生してゆくこの現象の剔出には、既存の秩序体系を無視して自己中心的に生きる田鶴子の人間的総体を、日常的価値判断に汚され

ない尺度をもって見定めようとする有島の認識姿勢が深く関わっているものと考えられる。一家離散の前日、「他愛もなく眠り入つて」(六)いる下の妹の貞世を「羽がい」(同)に抱く田鶴子が「同じ胎を借りて此世に生れた」「胸に」「ひたと共鳴する不思議な響」(同)を感じとる感情交流とか「死を覚悟した人が、最愛のものを見るのを恐れる様に」(七)定子に「遇ふまい」(同)としながらも、出航の前日、定子を預けている乳母のところへ無意識のうちに足を運んでいる状態も、この「肉体の記憶」に直結したものであり、ここにも、有島の同様の認識姿勢の特徴を見出すことができる。

三 田鶴子の母及び内田との対応力学

《(略)田鶴子の母が基督教婦人同盟の事業を始めて、(一)外国宣教師だとか、貴婦人だとかを引入れて、政略がましく事業の拡張を計る様になると、内田は火の様に怒つて早月親佐を責めて、(二)教祖の精神を無視した振舞だ、真正の伝道を妨げるものだと思ひいたが、親佐は夫れに取合はないので、両家の交情はひとりでに疎くなった。》(七、傍線引用者)

宮野光男氏は、『或る女』の葉子の親佐に対する批判の語りが「有島の愛説した『求安録』(明治二六・八)や、『宗教座談』(明治三三・四)に収められている内村鑑三の教会およびキリスト教外郭団体に対する批判と内容的に一致している」と分析され、そして、傍線部(二)の親佐に対する内田の批判について「有島がここでキリスト教批判を、内村の口を借りてしているということは、とりもなおさず有島が、内村に対して一種の共感と期待を抱いていたからに他ならず、それゆえに作品における葉子の、内田に対する期待もまた思ひのほか根深いものではなかつたかと思われる」と述べておられるが、『グリンプス』においても、事情は異なるものではない。

傍線部(一)の「政略がましく」基督教婦人同盟の「事業の拡大を計る」親佐が、所謂形式主義と偽善性に堕した俗物的キリスト教徒であることは言うまでもないが、主人公・田鶴子にとって、母・親佐はただそのための単なる敵対者ではない。《母は——田鶴子は其母に一種の執着を感じながら、時には両立の出来ない仇を思はずには居られなかつた。(一)母は新しい型に我が子を取り入れる事を心得

ては居たが、夫れを取り扱ふ事を知らなかつた。(二)田鶴子の性格が母の備へた型の中で驚くほどのすると発達した時に、母は他の天才を妬む魔女のやうに田鶴子の道を閉ざうとした。田鶴子はしかし云ひなり次第になつては居なかつた。而して此(三)二人の間には第三者には想像も出来ない奇怪な反目と衝突が続いたのである。田鶴子の性格は此相闘の結果曲折の面白さと醜さを加えた。》(十六、傍線引用者)

傍線部(一)の親佐が田鶴子を「取り入れ」ようとした「新しい型」は、自由潤達な個性的生き方であつたと考えられる。赤坂学院は十二歳の田鶴子に「祈禱と節欲と殺情とを強ひた」(八)が、彼女の大人へと成長してゆく自然の生命力は、「おほろげながら神と云ふものを恋し」(同、傍点引用者)はじめ、彼女の鋭敏で奔放な美的感性は「早熟の恋を追ふ」(同)心情を感じさせるような神への捧げ物を作り上げるのである。また、この美的感性が日常的生活面に発揮されると、「袴を紐でしめる代りに尾錠でしめる」(二)新流行を生み出すような服装美の工夫となり、この田鶴子の鋭敏な個性的感性はクラスメイトを「inspire」(十)する結果を招いている。inspireされた彼女達が「大胆に其当時の習俗を打破つて奔放な振舞」(同)に出たことは言うまでもない。

傍線部(二)の「他の天才を妬む魔女のやうに」「新しい型」の中で成長した「田鶴子の道を閉」す親佐の特徴は、田鶴子と木田との恋愛の進行過程において明瞭に定着化されている。田鶴子と木田との知り合う機縁は社交的な親佐の力によって生まれたのであるが、「十九歳」(二)の田鶴子は「既に多数の男に恋せられて、其間を手際よく練りながら、自分の若い心を楽しませて行く程のタクトを有して居」(同)り、周囲の外圧的力に屈するような弱者ではない。自己の内的衝迫を疎かにできない強い女である。このような田鶴子が木田に傾倒しはじめたのは、すでに見てきたように、尊大な自負心と過剰な自意識をもって磨く田鶴子の「面目の美学」が、日清戦争の従軍記者としての栄光に支えられて世間の人気を博している木田の存在の高みと、「公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で」「持ちあしら」(同)いながら木田を手中に入れる親佐の征服者の自由を許すことができなかったからに外ならない。親佐の「魔女のやうに」「妬む」邪魔だては、このようにして、田鶴子の木田との恋が生まれる時に始まるのである。

「二人の跡を影の如く逐」(一)う親佐の「激しい猜疑の眼」(同)は、娘の将来を氣遣う「母親」のものではない。結果的には、この「魔女」のような嫉妬で邪魔だとする親佐の情念が「田鶴子の情火に真剣の油をそぐ事にな」(同)るのであるが、この時、田鶴子と親佐との間に起こる情動的角逐は、『かんかん虫』の二稿の世界では想像もつかない新たな認識視角を開いていると言わなければならぬ。それは孝養か恋愛かの二者択一に迫られて苦しむ「かんかん虫」(二稿)の里が背負うような古風な義理人情の枠組みを離れ、人間の本源的生の実相を見定めることのできるものである。

「心の奥の動揺に刺戟されてたくらみ出す」(同)親佐の「残酷な譴計」(同)とか、田鶴子の分娩した「嬰兒に木田の面影を探り出して、基督教徒にあるまじき取扱」(同)をする親佐の衝動、そして、「肉と肉との恋」(同)によって親佐への「面当て」(同)をし、「習俗的の割符」(同)を粉碎しようとする田鶴子の反逆的衝動は、様々な仮面の裏側で無意識のうちに働く反射的な自然情動と言えよう。これら田鶴子と親佐の見せるこの多様な二面性は、そのまま、有島自身生の底部に深く根を下ろすものと言ってよからう。

《肉に強くて霊に弱く、財に裕かにして心貧しき我、加ふるに生来の鈍根を以てして、屢々神の眼を避けんとす。我が基督に到らんは駱駝が針の眼を通過するよりも難し。(略)信仰によりて生き、信仰によりて死するの聖生涯に臨む時は果して何時なる可き。》(明治三十三年五月二十五日、日記)

このように、「女流基督教徒の先覚者」(一)としての華やかな活動とか、家庭内で「夫を全く無視」(同)する振舞いなどに現われる親佐の新しさと「男勝り」(同)は、田鶴子の中に強靱な自立的自我と強烈な個性的生活姿勢を育ててゆく大きな力になりながらも、その力によって「驚くほどするすると発達した」(傍線部二)田鶴子の自由潤達な個性的生は、逞しい自然的衝動と鋭利な才知、感性を支えに峻厳な闘争を求めてゆくのである。傍線部三の「第三者には想像も出来ない奇怪な反目と衝突」は、このように成長した田鶴子の個性と親佐の個性との間に起こる軋轢に外ならない。

ところで、内田は親佐とは対照的な特徴を持つ真正のキリスト教徒と言えよう。もっとも、親佐が田鶴子にとって徹頭徹尾敵対者ではあり得なかったように、内

田は田鶴子にとって徹頭徹尾信奉者ではあり得なかったのである。

《(略)一人を恐れずにぐんぐん思つた事を言つて退ける心置きのない態度が、始終人から距てを置かれた内田を喜ばしたので、田鶴子が来ると内田は、何か心のこだわつた時でも機嫌を直して、(略)田鶴子の頭を撫でたりなぞしたものである。(略)かの木田との離婚が暴露したので、内田は或日厭成なしに田鶴子を自分の家と呼びつけて、(二)恋人の心変りを責める嫉妬深い男の様に、火と涙とを眼から迸ばしらせて、打も据え兼ねぬまでに怒り狂つた。(三)此時ばかりは田鶴子も心から激昂させられた。(略)往來を歩きながら、(四)憤怒の齒ざしりを止めかねた。然し夫れと同時に何んだか大切なものを取り落した様な、自分を此世に釣り上げて居る糸の一つが切れた様な不思議な淋しさがひしひしと身をせめた。》(七、傍線引用者)

傍線部一の「心置きのない」田鶴子の態度が世故にとらわれない天真爛漫な気性に支えられたものであることは言うまでもないが、このような気性を見抜いて田鶴子を可愛がる内田の性情も、真率一途な美点を備えていると言えよう。これは、親佐が「政略がましく事業の拡張を計るようになる」と「火の様に怒つて」「教祖の精神を無視した振舞だ、真正の伝道を妨げるものだ」と息巻く(七)く心根に直結するものである。有島は後年、「私の眼から見ると、基督教会の創始者と称へられてゐる基督その人は絶大な leader の一人であつたかと思ふのです。今の基督教会は基督の名に於て成り立つてゐるものですが、今仮りに基督がこの世に生まれて来たとし、(略)その教会の元首となつて下さいと頼んだと想像して見たら如何でせう。(略)基督は必ずその教会に属することなく或は教会に対して非難の声を挙げるやうなことが起るのではないかと思ふのです」(大正九年、『ホキットマンに就いて』)と述べているが、この批評精神に着目する時、有島の内田に対する共感と期待は、宮野光男氏の指摘^⑥のとおり、確かに深いものであつたと言わなければならない。問題はこの内田と田鶴子とを対立させる状況設定の意味である。

傍線部二において、木田と離婚した田鶴子に対する内田の怒りを「恋人の心変りを責める嫉妬深い男の様に」という比喩を用いて表わす有島は、内田の一途な教導的姿勢の背後にも働く無意識の性的情動を明確に見定めていたと言えるので

はなからうか。「火と涙とを眼から迸ばしらせて、打も据え兼ねぬまでに怒り狂」う内田の姿は、平凡な日常生活人の誰もが持ち合わせている喜怒哀楽の情を最も激烈な形で爆発させたものであり、ここには、求道者の冷厳な裁きの重みとか宏量な抱擁力の温もりを感知することはできない。傍線部③の「心から激昂」する田鶴子の怒りは、堅固な信念に基づき人間的総体をかけて、離婚した田鶴子という人間の生き方を全否定しようとする内田への反射的怒りに外ならない。これは眼前の小さな利害得失を考慮するような合理的判断を超えたものであり、親佐とか五十川女史との間には見られない真率な心底告白の怒りと言えよう。それだけに、この怒りによって生じた亀裂が傍線部④の「何んだか大切なものを取り落した様な」気持ちを齎すのは必然の成り行きと言わなければならない。

五年後、渡米を目前にした田鶴子が、内田の激昂時に言い残した「基督に、水をやつた、サマリヤの女の事も思ふから、此上お前には何も云ふまいが、……他人の失望も——神様の失望も些とは考へて見るがい、……罪だぞ、恐ろしい罪だぞ」

(七、傍点引用者)という言葉が、内田を訪問するのであるが、これは内田の言葉に、日常生活次元での差異、衝突を超えて田鶴子の魂の深部に響く内田の真率一途な倫理性を感知することができたからと言えよう。五年振りに内田を訪れる田鶴子が「せめては雷の様な其怒りの声に打たれ」「あはよくば自分も思ひ切り言ひ罵ろうと思」(同)う気持ちがそのことを証明している。もともと田鶴子のこの期待は「世の凡ての人よりも更らに冷酷」(同)な仕打ちによって打ち砕かれるのであるが、この時の田鶴子の不幸は内田の純化された魂の怒りと反射的に対決しなければならぬ自然的衝動を、余りにも逞しく持ちつづけていたことである。

遠藤周作氏は『イエスの生涯』(昭和四十八年十月、新潮社)の中で、「洗者ヨハネが一木一章もない荒涼たるユダの砂漠できびしい父の宗教を説いたとするならば、イエスの母の宗教はガリラヤのなだらかな丘、やわらかな光、そして穏やかな湖とその湖畔の町々にその精神的風土を見出すだろう」と述べておられるが、内田はまさに「父の宗教」を生きた人物と言わなければならない。

「一言内田さんに仰つて下さいまし。七度を七十倍はなさらずとも、せめて三度位は人の尤を許して下さいましつて」(七)と内田の妻に激昂しながら伝

言を依頼する田鶴子は、絶対性を容認することのできない逞しい自然的衝動によつて、内田の峻厳な「父の宗教」をも敵に回さなければならなかったのである。

この時の田鶴子の目指す標的は内田の高潔な倫理的生の抱え持つ独善的な絶対姿勢である。「意地も生地も」「目茶苦茶に打砕かれ」「上品な顔だてに中世紀の尼に見る様な表情を浮べ」(同)る内田の妻君の様子は、この独善的な絶対姿勢を容認することによつて招いた自己抑制乃至は自己喪失の姿に外ならない。逞しい自然的衝動と鋭利な才知、感性を支えに、自己中心的な生を個性的に生きる田鶴子にとって、この妻君の生き方は許しがたい敗者の醜態であつたと見なければならぬ。内田の妻君の「辛棒」(同)を一つの美德として容認しようとする時、その「辛棒」(同)を強いる内田の「我儘」(同)は特権化した男性の横暴として厳しく裁かねばならなくなるのである。しかし、この内田の我儘なる「父の宗教」は、「面目の美学」とか親佐の策略的な生活にかかずらう田鶴子の生を遙かに高く超えたものである。田鶴子と内田との対決設定は、田鶴子の反射的な自然情動と虚栄的な「面目の美学」のみならず、内田の高圧的な教導姿勢の独善性をも相対化しながら、田鶴子の海図なき海への出航とその果てに回帰すべき魂の安息場所の方向を暗示するためのものと言えるのではなからうか。

四 田鶴子の古藤との対応力学

一章に登場する古藤は、田鶴子の妖艶華麗な美しさと強大な自尊心をひそかに支える朴実な青年の役割りを發揮している。「親しげに」(一)「肩を比べながら、しづしづと歩」(同)く田鶴子に声を掛けられ、そして、指先の「掌に触れる機会を求め」(同)られる古藤は列車の窓から覗く人目を意識し、「物慣れない処女の様な羞恥と心の底に閃めく一種の屈辱とを感じて俯向いて仕舞」(同)うのである。「心の底に閃めく一種の屈辱」が具体的にどのような心情なのか、この場面だけでは理解しがたいが、「物慣れない処女の様な羞恥」を見せる古藤の心には、世知に汚されないで、理念的枠組みの中で節度を保つ純真さとそれなりの鋭敏な自意識が働いていたはずであり、田鶴子の自己中心的な「面目の美学」の巻き添えを被る時、「一種の屈辱」は自ずから働いたものと考えられる。

車内で思いがけず遭遇した木田に送ろうとして拒否された「笑みかまけた眸」

(同)を左隣の古藤の頬あたりに落し、そして、「木田に見よがしと云ふ態度」(同)で古藤に「華かに」(同)声を掛ける田鶴子は、彼の「單純な明かな心に、自分の笑顔の奥の苦い渋い色が洞察されたかと、思はずだろ」(同、傍点引用者)がねばならないのであるが、こうした力を備えた古藤は、田鶴子の心に倫理的な抑制を利かせる役割を担った人物と見なければならぬ。

《古藤の隣に居るのさへ一種の苦痛である。(一)其無邪氣な瞑想的な態度が、(二)田鶴子の内部的経験や苦悶と全く没交渉で、二人は到底相互の同情の雰囲気内に入る事が出来ないと思ふと、(三)田鶴子は自分の特殊な生活の辺境に窺ひ寄する探偵を此青年に見出す如く覚えて、其五分刈りの頭顱は翫ぶにだに足らぬ木屑とも見えた。》(三、傍線引用者)

傍線部(一)の古藤の「無邪氣な瞑想的な態度」が田鶴子の心に大きな特徴として強い印象を留めていることは、一章の末尾において、「練戸のガラス越しに、切割りの蛙を眺めてつくねんとして居る古藤に「又、何か考へて居らつしやるのね」(傍点引用者)と声を掛ける田鶴子の言葉から見ても明らかである。古藤のこの瞑想的な特徴は、不断の田鶴子にとっては何ら嫌悪の対象になることはないものである。ところが、傍線部(二)のように、古藤が「田鶴子の内部的経験」と「全く没交渉」な人物に感じられ、果ては、田鶴子の「特殊な生活の辺境に窮ひ寄する探偵を此青年に見出す」ような傍線部(三)の不安に陥るのは、「面目の美学」を守るための田鶴子の演技的生活姿勢に古藤が加担しないからに外ならない。田鶴子の強大な自尊心はそれによって大きく損われ、古藤に対する好意は憎悪へと一変するのである。もともと、田鶴子の古藤に対して抱く感情が好意的なものであるだけに、愛憎の反転によって生じる憎悪は普通以上の激しさを加えると言つてよからう。田鶴子が一人の中年紳士から起った「笑声」(三)に居たたまれずデツキに出る時の古藤の対処に、「simpleton」(同)と「心の中」(同)で叫ぶ田鶴子の思いにも、同様に愛憎の反転を見出すことができる。

自己の内的衝迫と「面目の美学」の二つの力によって生じる、田鶴子の転変著しい愛憎の起伏に翻弄されながらも、朴実に節度を保ち誠実に田鶴子に助力を尽す古藤は、日常的生活次元における田鶴子の対人関係に働く力学構造を鮮明に照らし出すと同時に、その力学の底部に潜む反射的な自然情動と「面目の美学」の

魔性的特徴を開示する役割を果たしている。横浜駅で下車し、休息するために入った宿における次の場面は、この古藤の役割を見る上で、とりわけ重要な意味を持っている。

《床の間を背にして、陣内の布団の上に、撥巻を脇の下から羽織つた田鶴子が、派手な長襦袢一つで東欧羅巴の嬢宮の人の様に、片臂をついたまゝ横になつて居た。而して(一)湯と酒とではんりのりはてつた顔を挙げて、大きな眼を夢の様に見開いてちつと古藤を見た。枕元には三鞭の瓶が本式に氷の中につけてあつて、飲みさしのコップや、華奢な紙入れや、かのオリブ色の包物を、(二)しごきの赤が火の蛇の様に取り巻いて、其端が指輪の二つ簪つた大理石の様な手にもてあそばれて居た。/(略)/(三)田鶴子は一寸真面目に「本統にありがたう御座いました」/と頭を下げたが、忽ち roguish な眼付きをして「まあ夫れは何れ跡で、ね、何しろ寒かつたでせう、さ」/と云ひながら残つた酒を盆の上になつとこぼして、コップを差出した。古藤の眼は輝いて居た。/「僕は飲みません」/「おや何故」/(四)「飲みたくないから飲まんです」/此角張つた返答は男をあやし慣れて居る田鶴子にも稍意外であつた。》(五、傍線引用者)

古藤は部屋に入ろうとした瞬間に、「ぎよつと」「立ちすくん」(五)でしまうのであるが、これは「香水や化粧や酒の香を合わせた暖い、いさ」(同)が彼を包みこみ、情念に響く何ものかを感知したためと考えられる。傍線部(一)の「湯と酒とではんりのりはてつた顔を挙げて」「ちつと古藤を見」る田鶴子の「夢の様に見開い」た「大きな眼」には、自信に満ちた蠱惑的媚態が熱っぽく凝集していると言つてよからう。傍線部(二)の「指輪の二つ簪つた大理石の様な手にもてあそばれて居る」「火の蛇の様」な「しごきの赤」は、当然、田鶴子の蠱惑的な媚態の底部に潜む性的情動の象徴と見なければならぬ。傍線部(三)において、「一寸真面目」なものの言いの後、「忽ち roguish な眼付き」となつた田鶴子が酒のコップを差し出すのを見やる古藤の眼の輝きには、純朴無垢な古藤の心にも一瞬燃え上がりかけた情念の輝きを見出すことができる。

朴実に節度を保ち実直に田鶴子に助力を尽しながらも、鋭利な批評精神を常に働かせていた古藤の田鶴子に対する評価判断は、古藤の木村に宛てた書簡の中に窺うことができる。「明白に云ふと僕はあゝ云ふ人は一番きらひだけれども同時

に一番引きつけられる」「僕は此矛盾を解きはごして見たくてたまらない」「是が女のTactと云ふものかと思つたやうな事があつた」「神は悪魔に何一つ与へなかつたがAttractionだけは与へたのだ」「兄はまだ田鶴子君の心を全然占領したものだとは思はれない」「(十九)と述べる古藤は、田鶴子の蠱惑的な媚態に潜む女の魔性とかその謎深い魅力を十分に感知していたと見なければならぬ。傍線部(四)の「角ばつた」古藤の「返答」はこの批評眼をもって田鶴子を対象化し、そして同時に、自己の情動に抑制をかける古藤の自省の現れと見ることが出来る。

「男をあやし慣れて居る」田鶴子の技巧を払いのけて抗う古藤の「意外」な対応は、強大な自尊心をもって自己中心的に生きる田鶴子にとっては、当然容認しがたいものであつたはずである。「角ばつた返答」の後、酒を飲んでいた田鶴子の状態を念頭に置きながら、「貴嬢は一体末だ腹が痛むんですか」「夫れにしても中々元氣ですね」「(五)と「単兵急」(同)に田鶴子を問い詰める古藤の威勢は、とりわけ田鶴子の自尊心に痛く喰い入るものであつたと言えよう。ところが、田鶴子は「微笑みを其儘に」「陣立て」(同)を「整」(同)え、他の諸人物に見せるような衝動的な報復行為に決して出ようとはしないのである。「勝手氣儘な」「親切ごかし」(同)を押しつけてくる親類縁者とか醜悪な木村の我執に籠絡されている自分の悲惨な境遇と、それに抗いつづけなければならぬ「他人様とちがつ」(同)た自分の悲しい性を語りながら飲酒の弁明を重ねる田鶴子は、それに同情も示さず田鶴子の荒んだ非常識的な生活姿勢の非を「ぶつきらばうに」(同)否定する古藤の威勢に押され氣味となつており、二人の力関係は平素のそれを逆転し、古藤が强者の位置を占めていたと言えよう。

もっとも、田鶴子にしてみれば、「古藤を味方にして置く事の必要」(同)から、弱点を便宜的に誇張して表わしたに過ぎないということにもなるが、「淋しく笑つた」(同)り、「自信の影」(同)を「顕は」(同)したり、また、「輕侮の色」(同)を「漲」(同)らせたりする田鶴子の千変万化の表情の合間にただ一度だけ顔を覗ける古藤の「眼も動かさず、ぶつきらばうに答へ」(同)る表情には、田鶴子の技巧を超えて朴直誠実に生きる强者の重い落着きが感じられる。

《古藤は田鶴子の顔を見るのを避ける様にいたいたしく乱れ返つた服地などを眺め廻して居たが、見ると田鶴子は横腹にふかふかと手をやつて、せき込む痛

みを堪えて居るらしい。(一)驚いて思はずいざり寄つた其時、(二)田鶴子は豹の如く滑らかに身を起して逸早くも堅く古藤の手を握つて居た。而して(三)「義一さん」/と云つた声は涙と共に出たかの様にうるんで居た。(四)古藤も声をわな／＼かして「木村はそんな人間じやありませんよ」/とだけ云つて黙つて仕舞つた。(五)田鶴子の頭はぶるぶると小さく震へたまゝ二度深々とうなづいた。而して暫くしてから田鶴子は顔を上げたが、(六)泣いたらしい模様は少しもない。》(五、傍線引用者)

傍線部(一)の古藤の動作を支える心情は、自覚された意識のもとでは、朴実に節度を保ち誠実に田鶴子に助力を尽している古藤の性格設定から見て、どこまでも田鶴子の病状を氣遣う驚きと見なければならぬ。そして、傍線部(二)の古藤に身を寄せる田鶴子の動作を支える心情は、計測した「陣立て」(五)によつて古藤を征服しおえた自信と「不図した出来心」(同)によるものと見てよからう。「不図した出来心」が古藤を誘惑する情念の働きであることは言うまでもない。傍線部(三)の「涙と共に出たかの様にうるんだ」呼び掛けの声には、古藤の心を誘ひ込もうとする田鶴子の情念が熱く燃えているのであり、これは多くの男性を征服した蠱惑的な媚態に外ならない。ところが、古藤は朴直に節度を守り、傍線部(四)の滑稽帯びた友情を発揮するのである。傍線部(五)の「ぶるぶると小さく震へたまゝ二度深々とうなづ」く田鶴子の表情には、朴直真摯に生きる古藤の一途な思いに敗北して嘔みしめる慚愧の思いが隠されているのではなからうか。傍線部(六)には、古藤の朴直な一途さによつて相対化された田鶴子の滑稽無惨な生活姿勢を印象的に定着化していると言えよう。

むすび

《(略)無遠慮を許して下さい。兄の同情は、広汎だとは如何しても云へないと思ひます。兄の作が未完成だなどと言つたのも、僕は主に此の点から思ひ付いた事でありませう。僕は近頃暇々にトルストイの『戦争と平和』を読んで居ますが、其の同情の広汎なのは、惻れて仕舞ひました。》(傍点引用者)

これは明治四十四年四月「白樺」に発表された「『お目出たき人』を読み」の一節であるが、この作品批評を行う際の評価観点としての広汎な同情は、『グ

リンプス』執筆時の作家有島の在り方を規制する基準にもなっていたものと考えられる。『桃色の室』について「桃色の女の夫と灰色の男とはなんだか永久の敵のようにも見えるが、もし偶然に二人の手が握り合わされたことがあつたら、両方から思いも設けぬ暖かみが通うのではないだらうか」（『お目出たき人』を讀みて）と評する言葉を対応させてみる時、広汎な同情が人間を固定化した型に嵌め込めるのではなく、多元的な視角から徹底的に見定める姿勢を意味するものであることは明らかである。

ところで、出航前における田鶴子の人物形象を支える人間関係としては、四種の関係を挙げることができる。その第一は鋭利な才知と感性をもって個性的且つ戦闘的に生きる木田との関係である。田鶴子はこの木田の特徴に蠱惑的な魔性を併せ持った人物である。第二は謎深い情念をもって政略的且つ行動的に生きる親佐との関係である。木村はこの親佐の特徴に若い情熱を併せ持った人物である。

第三は堅固な信念をもって求道の且つ高踏的に生きる内田との関係である。古藤はこの内田の特徴に朴直な節度を併せ持った人物である。そして第四は、深い利欲をもって狡猾且つ打算的に生きる親類縁者との関係である。

妖艶な美貌と鋭利な才知、感性と強大な自尊心をもって個性的に生きる田鶴子は、「面目の美学」を守るとともに自己の内的衝迫を満たすべく、放逸華麗な固有の生を追いつづける魔女的危険性を備えた女性と言えるが、問題はこの田鶴子の個性的性格と四種の人間関係を設定することによって、有島がどれほどの広汎な同情を発揮することができたかということである。より具体的に言い換えるならば、自己自身の混迷した生活に立脚しながら、謎深い人間の深層の闇にどれほどの照明を与えることができたかということである。

田鶴子の出航前のこうした状況設定によって、有島が明確に見定めることができたと考えられる第一の問題としては、高邁な信念とか主義主張によって推進される人間の文化的営為の基底に潜む謎深い性的情動の問題を挙げることができる。「おぼろげながら神と云ふものを恋し」（八）はじめて作り上げた神への捧げ物、木田との恋愛において「競争すべからぬ関係の競争者」（二）となった親佐の情念、「恋人の心変わりを責める嫉妬深い男の様」（七）な内田の怒り、そして、朴実に助力を尽す古藤に対する「不図した出来心」（五）などにそれを見出すこ

とができる。

次いで第二は四種の人間関係が田鶴子の個性的生に対して発揮する両義機能の問題である。謎深い情念をもって政略的且つ行動的に生きる親佐の華麗な生活姿勢は、田鶴子の個性的生を生み出す力になると同時に、それを滅ぼす力をも発揮するのである。田鶴子は親佐の影響下にあって熱い情念と冷やかな理知を育てあげ、そして、他者告発の鋭利な批評精神と過剰な自意識と逞しい自然的衝迫の交錯する際限のない闘争の道へと駆り立てられている。また、堅固な信念をもって求道の且つ高踏的に生きる内田の生は、田鶴子にとって、自己固有の内的生命体を圧殺する残酷な脅威であると同時に人間の生命の裸形を開示してみせる威力を備えたものとも言えよう。そして、木村との結婚準備を古藤の助力によって行いう出航前の田鶴子の生活は、親佐の生活と内田の生活との相剋葛藤を重ねながら、自己確認と他者依存に揺れ動く田鶴子自身の内的混迷状態の象徴に外ならない。

最後に第三は自己の内的衝迫と鋭利な批評精神をもって個性的に生きる田鶴子の自己中心的な生活姿勢が、そのまま、他者の眼を敏感に意識する「面目の美学」と過剰な自意識に変転してゆくアイロニーの問題である。

「僕の生命は原始的な純一さを持たずに、文明の病毒を受けて何時でも二元に分解されてゐる」「僕は自己の分解を徹底させる。掘り下げて遂に個性を見失ふか、又はそこに不壊の金剛土を見出すか、二つに一つだ」（『迷路』）という決意を持つ有島の認識の旅への出発は、『グリンプス』における出航前の、この田鶴子の個性的性格と四種の人間関係の設定によって十分に用意されていたと考えられるのであり、田鶴子の運命を凝視する有島の眼は、トルストイと同一の広汎な同情に温かく柔らいでいたと言えるのではなからうか。

〈注〉

(1) 拙稿「『老船長の幻覚』（有島武郎）論——悲劇性の原拠——」（昭和五十六年七月、岡山県立短期大学研究紀要第二十五号、十九頁）参照。

(2) 拙稿「『かんかん虫』（有島武郎）考」（昭和五十七年七月、岡山県立短期大学研究紀要第二十六号、四頁）参照。

(3) 「『或る女』論——へ夢幻」とへ屈辱」をめぐって——」（昭和四十一年

十一月、日本近代文学五号へ日本文学資料叢書「白樺派文学」所収、昭和五十二年七月、有精堂、九十四頁）

(4) 「有島武郎の文学」(昭和四十九年六月、桜楓社、百九十頁)

(5) 『クララの出家』のエロスとアガペーの一致の原型をここに認めることができるのではなからうか。小坂晋氏は笹渕友一氏の見解への反論として、「クララは欣然として宗教一筋に赴いているのであって、霊肉二元の葛藤による悲劇というよりも、エロスとアガペーの一致、本能生活としての信仰が描かれている」(「有島武郎文学の心理的考察」(昭和五十四年九月、桜楓社、百三十二頁)と論じておられる。

なお、笹渕友一氏は、『クララの出家』の主題について、「その主題はいわゆる聖女的人間像のかげに潜む生理的、世俗的欲望を分析し出すことにあるのではなく、或はむしろそれを前提として、そのような欲望と戦うことによって確立された信仰者の姿、二者択一がもたらすその悲劇的な性格美を描き出すことにあつたというべきである。したがって有島の二元分裂から生れた主題であり、「或る女」「カインの末裔」などの対極にあるという従来の解釈は破棄する必要はない」(「有島武郎『クララの出家』の主題」へ「明治大正文学の分析」所収、昭和四十五年十一月、明治書院、七百八十五頁)と論じておられる。

(6) 注(5)に同じ。

(7) 笹渕友一氏はこの内田の態度について、「やや異常な感銘を与える。しかし内田が木田への裏切りを自分への裏切りと錯覚するのはおかしいし、ここには有島特有の誇張的表現が犯した過ちと見た方がよからう」(「『或る女』の主題」へ「明治大正文学の分析」所収、昭和四十五年十一月、明治書院、七百四十五頁)と分析されている。

(8) 本多秋五氏は、古藤は「重要な場面には必ず登場」する人物であるが、『グリンプス』における存在意味は軽いとされ(「白樺の文学」へ昭和三十年十一月、講談社、百七十三頁)、笹渕友一氏はこの本多氏の意見を踏まえ、「前編における古藤の存在の意味が明確でなかったのは、葉子の浪漫的欲求の実体がまだ明確でなかったから」(「『或る女』の主題」へ「明治大正文学の分析」

所収、昭和四十五年十一月、明治書院、七百六十頁)と分析されている。そして、西垣勤氏の論には、「『グリンプス』の中心をなす劇は横浜シャトル間の船中にある」ので、そこに居あわせない古藤が「重要な役割を演じないのは現象的に見てあたり前のことである」(「有島武郎論」へ昭和四十六年六月、有精堂、百三十六頁)という見解が見られ、また、鳥居明久氏は「古藤は、何かを主張したりして田鶴子に対して積極的、能動的にかかわろうとはしないのだが、田鶴子をしつかりと見きわめようとする」「観察者」(「『或る女のグリンプス』から『或る女』後篇へ——古藤を手がかりとして——」へ「有島武郎『或る女』を読む」紅野敏郎編所収、昭和五十五年十月、青英社、二十八頁)であると論じておられる。

昭和六十二年十一月十二日受理